

なぜ私たちは災害リスクにうまく対処できないのか？
～書評「ダチョウのパラドックス 災害リスクの心理学」～

藤居 学（AIG 総合研究所 主任研究員）

ダチョウのパラドックス 災害リスクの心理学

丸善出版 2018

著：中谷内 一也（同志社大学 心理学部教授）

はじめに

PART 1 なぜ我々は災害に対して不十分にしか備えないのか

第1章 二つの認識システムについての物語

第2章 近視眼的思考癖

第3章 忘却癖

第4章 楽観癖

第5章 惰性癖

第6章 単純化癖

第7章 群衆への同調癖

PART 2 災害準備を改善するために我々ができること

第8章 バイアスの克服:行動リスク監査

第9章 行動リスク監査の運用:洪水保険の場合

第10章 きわめて長期にわたる災害対策

あとがき: “改訂版、ダチョウのパラドックス”

昨今、国内外で異常気象や自然災害が続発しています。数十年に一度、あるいは数百年に一度といわれるような災害が毎年のように発生する事態の背後には地球温暖化の影響があるとも言われており、今後も災害に翻弄される時代が続いていく可能性が高そうです。

このような「災害の時代」を乗り越えていくためには、私たちはそのリスクを正しく認識し、事前にできる限りの備えを怠らず、いざ災害が発生したときには迅速な避難などの的確な行動をとらなければなりません。ところが実際には、災害のリスクを見誤り、十分な事前の備えをとらず、災害が発生しても的確な行動をとれず逃げ遅れる、といった事態がしばしば起こります。

これは、なぜなのでしょう？

その原因が「情報不足」にある、と考える人は多いでしょう。だとすれば、専門家による正確な情報を行政やマスコミを通じて十分に提供できれば、人々は合理的に災害リスクに対処できるはずですが。しかし実際には、たとえば避難指示をテレビなどで繰り返し見ても避難せず、結果的に逃げ遅れる人々が少なくありません。それはまるで、きわめて俊敏な逃げ足をもっているにも関わらず、ピンチになると頭を砂に突っ込むという誤った対応でやりすごそうとする「ダチョウのパラドックス」（本書のタイトルはこの逸話に由来します）のようです。

本書では、災害リスクへの対処に失敗する理由として、以下の6種類の心理的バイアス（誤った認知的判断をしてしまう傾向）があることを指摘しています。

1. **近視眼的思考癖**：災害対策のコストと潜在的なベネフィット（便益）を考えると、あまりにも目先の時間範囲内で判断してしまう傾向
2. **忘却癖**：過去の災害の教訓をあまりにも早く忘れてしまう傾向
3. **楽観癖**：将来の災害が引き起こすかもしれない損失について過小評価してしまう傾向
4. **惰性癖**：新しい災害対策が使えてもその効果が少しでも不確かならば、現状を維持しよう、初期状態を変えないでおこうとする傾向
5. **単純化癖**：リスクに関する意思決定を行う際、関係する諸要因の中から一部分だけに注意を向ける傾向
6. **同調癖**：ほかの人の行動を見て、それに合わせて自分の行動を決める傾向

（本書 21 ページ）

私たちの認知システムは、直感的・感情的・自動的に作動する「システム1」と、分析的・論理的・意識的に作動する「システム2」の二本立てで構成され、システム1による直感的判断をシステム2が必要に応じて理性的に調整するという仕組みだとされています（二重過程理論）。

このシステムは、目の前で頻繁に発生する日常の問題に対しては概ね有効に働くのですが、何十年も先の災害のリスクに備える場合や、過去に一度も経験していない突発的な緊急事態に対処するには大きく判断を誤ってしまうことがしばしばあります。その判断ミスの傾向を類型化したのが、上記6つの心理的バイアスということになります。

これらの心理的バイアスは、いずれも災害リスクへの対処を誤った方向に導いてしまいます。「近視眼的思考癖」と「忘却癖」、「楽観癖」によって過去の災害被害は忘れられ、将来の災害リスクは過小評価され、防災への投資は無駄なことだと判断される傾向が強まります。そして「惰性癖」と「単純化癖」によって、これまでとったことのない新たな災害対策を採用したり様々な対策を網羅的に準備したりすることに対して心理的抵抗が働き、さらに、「同調癖」によって、災害が起こって危険が目前に迫っている状況でも「ほかの人が動いていないから」という理由で避難行動が遅れるといった事態が発生します。

このような誤りは、災害に対する知識が不足しているから起こるのではなく、そもそも人はそのように誤る傾向をもっているのだというのが、本書の主張するところです。

そのうえで、本書の後半では、これらの心理的バイアスを否定するのではなく、避けられない所与のものとして認めたいうえで、災害リスクに適切に備えるためのアプローチとして、「行動リスク監査」というアイデアが示されます。

行動リスク監査は対象とするハザードに応じて4段階の分析から成り立っている。

- ・ **ステップ1：バイアスのリストアップ**

なぜ、人びとがそのハザードへの備えをおろそかにしてしまうかを検討する出発点として六つの中心的な心理的バイアスをリストアップする。具体的には、近視眼的思考癖、忘却癖、楽観癖、惰性癖、単純化癖、そして同調癖である。

・ **ステップ2：リスク認知への影響を描き出す**

それぞれのバイアスがどのようにして対象ハザードのリスクを過小評価することにつながるのかを検討する。

・ **ステップ3：災害準備への影響を分析する**

ステップ2で示された歪んだリスク認知がどのようにして災害準備計画にマイナスに働くのかを評価する。

・ **ステップ4：対応策の設計**

ステップ3で示された災害準備におけるエラーを克服するため、適切な行動に誘導できるインセンティブと説得とを組み合わせた計画を立てる。

(本書 127-128 ページ)

心理的バイアスによって私たちの判断がある方向に歪められる傾向があるのであれば、その傾向を自覚し可視化したうえで、意識的にそれとは逆方向に（つまり、よりリスク認識が的確になる方向に）認識や行動を変えていけば、災害リスクへの誤った対応を避けられるだろうということです。加えて、行政や専門家といった立場から他の人々の行動を変えなければならないケースにおいては、人々を適切な行動に誘引するためのインセンティブの設定など行動経済学的な視点も重要になります。

災害に対する備えや避難行動がうまくいかないのは必ずしも防災教育や情報提供の問題ではなく、私たちのもつさまざまな認知バイアスの影響が大きい、ということは、社会心理学の世界などでは以前から知られてきたことですが、本書は、その専門的な知見を多くの人にわかりやすく伝えてくれます。災害対策に関わる人はもちろん、いつ災害の当事者になってもおかしくない私たちすべてにとって、本書は災害リスクに備えるための有益な視点を与えてくれるでしょう。

※本ドキュメントは保険もしくはその他一切の金融商品の販売、勧誘を意図したものではありません。また、本ドキュメントは具体的な特定の取引をご提案するものではなく、その実現性を保証するものでもありません。

※AIG 総合研究所（以下「AIG」と呼びます。）は、本ドキュメントの利用あるいは利用の結果に関して、その正確性、精度、信頼性などについていかなる表明および保証も行わないものではなく、その利用の結果については責任を負いません。AIG は、本ドキュメントがいかなる場所においても適切であり利用可能であることを表明するものではありません。AIG は、正確かつ最新の情報を本ドキュメントで提供しようとする合理的な努力をしていますが、誤差・脱漏が生じる場合があります。

※AIG あるいは本ドキュメントの企画、作成または提供に関わるいかなる当事者も、お客様が本ドキュメントを利用したことあるいは利用できなかったことに起因する直接的、偶発的、結果的、間接的損害あるいは懲罰的賠償の責任を負うものではありません。

※本ドキュメントに掲載されている内容に関する権利は、AIG および AIG が利用許諾を得た著作権者に帰属します。無断で転用・複製・改変することはできません。